

umibe no mori

2026年9・10月号 VOL.158
海辺、雨あがりのポーチュラカ

医療法人精華園 情報誌

海^も辺^りの杜

ご自由にお持ち帰りください。



特定技能外国人を迎え入れました

～ 受け入れから現在まで ～

看護部長 徳弘 英史



いよいよ入国日の7月1日になりました。特定技能外国人のモニカさん、ナズワさん、ロディヤーさんの3名は長旅の疲れも顔に出さず「よろしくお願いします」と笑顔で高知入りしました。翌2日は海辺の杜ホスピタルでウェルカムセレモニーの歓迎を少し緊張した面持ちで受け、職員としての第一歩を踏み出しました。その後2週間の集合研修を多職種の協力のもと行い、研修の合間には病院周辺を実際に歩いて避難路を確認したり、交通機関の使い方の練習として、桂浜や高知城にも行きました。桂浜水族館では水槽の前でポーズをとって写真を撮り10代の女の子らしい笑顔を覗かせていました。

2週間の研修後、配属部署ではプリセプターと行動を共にし、まずは「日本の生活に慣れること」「職場環境に慣れること」そして「配属部署のユーザーさんと職員の顔と名前を覚えること」から始めました。受け入れ側の職員は「易しい日本語でゆっくり丁寧に話す」「出来るだけ標準語を使う」などに注意し全職員で支援するという気持ちで関わりました。最初こそ手探りででの対応でしたが、終始ニコニコ顔で人懐っこい彼女たちに接するうちにインドネシアの生活や彼女たちの人柄が知りたくなり、部署に配置した翻訳機は休憩時間に大活躍しました。

入職2か月目が過ぎ、配属部署にも少しずつ慣れてきました。3か月目の目標は「基本的な直接ケアを安全に実施する」です。一生懸命に取り組む姿勢からは、少しでも早く一人で業務ができるようになりたいという思いがひしひしと伝わってきます。

3名とも日本の介護技術を学び将来は母国に持ち帰りたい…。そんな大きな夢と希望を胸に来日しています。海辺の杜ホスピタルが培ってきた看護の技術や知識、そして何より「人を大切にする心」が彼女たちの夢への手助けになること、彼女たちの学びや姿勢が、これからの海辺の杜ホスピタルの力となることを信じています。

「教える側」「教わる側」と分けるのではなく、対等な関係を築くこと、お互いの価値観を尊重し、ともに成長していけるようこれからも手を携えて歩んでいきたいと思います。



星空の百年航海 2

医療法人精華園百年史編集委員長
依光 隆明

酒仙詩人の断酒

初代院長を務めた下司孝麿氏のご子息、孝之さんから資料を送っていただいた。中に立仙啓一という詩人の話があった。初めて聞く名だった。1914年夜須町(現香南市)の出身。東京外国語学校英文科を中退し、朝日新聞記者や高校講師をしながら生きた人だ。孝麿氏とは二つの接点があった。旧制中学の同級生であり、もう一つは医師と患者の関係。精華園で入院治療した体験を、立仙は1950年9月の高知新聞に書いている。題は「人間モルモット」。少しだけ引用する。

〈飲酒酩酊と現実素面のこの二つの世界は厳しく対立していて、中立の余地などあり得べくもない。酩酊をよしと見、素面をよしと見る――単なる趣味、好悪でなく一種のイデオロギー化された吞兵衛たちと素面乾燥居士大姉どものうまのあわぬのは浮世のならい〉〈エメチンはふしぎな白い粉末剤。吐根から採った催吐作用のある薬で輸入品である。空腹時にこれを少量服用してすぐショウチュウをクツと飲んだ。何のことはない、人工的な船酔い状態が三十分後にやってきた。(中略)連日一回、この吐薬を飲んでアルコールを胃に流し込むうちに、胃袋はアルコールに対して不倶戴天の抵抗を示してくる〉〈G博士は中学のクラスメートである私をモルモット第四号として重い「酒」から穏やかな「現実」へ解放してくれたのである〉

かくて立仙啓一は酒の呪縛から離れることができた。1951年に出た第二詩集『春愁』のあとがきにこう書いている。〈断酒の記念に第二詩集を出す。(中略)もう卒業して酒への妄執は霧散した。貧乏は相不変だが、健康だけは素晴らしく回復した〉。が、やがてまた酒に自らを委ねるようになる。著しくなったのは1968年に最愛の妻を亡くしてからだったらしい。立仙の妻は孝麿氏の下で精華園の医師を務めた田辺善丸氏の姉。妻亡きあと、立仙は酒仙詩人と呼ばれるほどに酒と一体化する。脳出血で亡くなったのは1981年、67歳のとき。酒が詩人を冥土へいざなった。

没後、立仙の才を惜しむ人たちが『立仙啓一全詩集』を編んだ。そこに第二詩集後の99篇も収められている。一つだけ、酒仙の境地を表すような詩を紹介しよう。

〈ある日どこかで／ぼくは消える。／ぼくがぼくでなくなり／ぼくが気づかず踏み殺したアリより軽い灰となり埋められる。／町の戸籍係はこともなげに／ぼくの名前を抹殺する。／それはうれしいことでも／かなしいことでもない。／戸をあけたてするようなもので／あけたとは生まれたことで／たてたとは死ぬることだ。／朝がくれば晩になり／晩になれば朝がくるだけのことだ〉



詩人の立仙啓一が「エメチン治療」を受けた当時の精華園と、その治療を担当した初代院長の下司孝麿氏とともに『精華園五十年史』より



第17回

海辺の メモワール

院長 岡田 和史

恐怖の「こっくりさん」体験と、思い出の心霊マンガ「うしろの百太郎」

今回は私が小学生の頃に起こったオカルトブーム、その中で流行したマンガとそれに影響されたおバカな小学生たちの思い出を書きたいと思います。

日本におけるいわゆるオカルトブームは1970年代と1990年代に2回の大きな波があったとされています。1970年代の第一次がちょうど私が小学生の時、1973年に出版された五島勉氏の「ノストラダムスの大予言」が発端とされています。16世紀ルネサンス期のフランスの医師であり予言者であるノストラダムス（本名はミシェル・ド・ノートルダムだそうです。最近はネットで簡単に調べられて本当に便利です）、彼が記した予言集がありこれは四行詩といわれる形式で書かれていて、内容が非常に難解で、様々な意味に解釈出来るようなものであったために、当時の貴族階級の人たちの中にも予言が的中したと考える人が多かったようです。そのためなのか、本当に医師としての腕が良かったのかはわかりませんが、国王の侍医まで務めたとのこと。五島氏はこの予言書の一節を、1999年に世界が滅亡すると解釈し、1冊の本にまとめたのです。

2026年になった今でも、世界は存続していますから、この1999年世界滅亡説は忘れ去られていますが、1970年代当時はそれなりにリアリティを持たれており、巨大隕石が地球に衝突するのではとか、第三次世界大戦が勃発し米ソが大量の核兵器を撃ち合って人類が滅亡するのではないかと、まことしやかに語られていたのです。小学生だった私も、「1999年なら36歳で死ぬのかなあとか、ドラえもんに出てくるような21世紀という未来を見ることは出来ないのかなあ」などと考えていたものです。

1974年には、スプーン曲げで有名な「超能力者」ユリ・ゲラーが来日、テレビで大々的に取り上げられ超能力ブームを巻き起こし、同時に、UFOブームや心霊写真ブームなどまさにブームと言うにふさわしい、オカルト物の大流行時代だったわけです。

さて、マンガ「うしろの百太郎」はまさにそういう時代である1973年末から3年間少年マガジンなどに連載された心霊恐怖マンガでした。作者はつのだじろう、昭和11年生まれ、現在90歳。デビュー後しばらくは少女漫画を描いており、非常に生真面目な方だったようです。1971年からあの極真空手の創始者大山倍達の伝記漫画「空手バカ一代」（梶原一騎原作）の第3部までの作画を担当し大ヒット、この頃、自身も極真会館の道場に2年余り通い実際に空手を修業したそうです。

その後に連載したのが「うしろの百太郎」で、内容はがらっと変わって、実話風心霊マンガでした。少し先じて、やはり少女マンガから出発した楳図かずお氏（つのだ氏と同じ昭和11年生まれ）が「蛇女」や「ネコ目の少女」などの怪奇マンガで有名でしたが、つのだ氏は自ら心霊研究にも打ち込んでおり、セミドキュメンタリー風の作風で、子どもからすると、「単なる怖いお話」ではなく事実をもとにしたストーリーだと思われ、一層怖さを感じたものです。マンガの中で紹介される様々な心霊用語や概念、「霊界」「霊能者」「前世」など、そう言えば「守護霊」や「地縛霊」という言葉と概念を初めて知ったのもこのマンガによってだったと思います。ちなみに「百太郎」は主人公、後一太郎（うしろいちたろう）の守護霊なんですね。今なら、主人公はワープ口か！と突っ込むところです。

元々小さい頃から怖がり、妖怪図鑑などという本も部屋で読むのが怖いので、昼間明るうちに家の前の歩道に座って近所の友達と一緒にないとページを開けないような岡田少年でしたから、自分を守ってくれる「守護霊」と言われても、いや、たとえ守護霊でも怖いから会いたくないし、マンガの中で、夜寝る時にこういう姿勢で横になって守護霊に呼びかけながら寝ると夢の中？で交信できるみたいな方法が紹介されていたのですが、うっかり守護霊とか出てきてしまったら怖いし大変だと思って、ますますウサギのぬいぐるみのラビちゃんと一緒にないと眠れなくなったりしたのです。

その百太郎のマンガの中で紹介されていたのが「こっくりさん」でした。こっくりさんとは、狐狗狸さんとも書き、一般にキツネなどの霊を呼び出す、一種の降霊術とされています。どうやら元々は西洋に15世紀ごろにはあったテーブル・ターニングというもの明治時代に日本に伝わり流行したのが始まりのようです。

一般的には、紙に五十音（「あいうえお」から「ん」まで）、「はい」、「いいえ」、「男」、「女」などの文字、0から9までの数字、鳥居の絵などを書き、そこに10円玉などの硬貨を置いて、取り囲んだ3人ないし4人が人差し指を伸ばしてその硬貨に乗せて準備完了です。「こっくりさん、こっくりさん、どうかこの***（住所など）までおいでください」と呼びかけると、紙上の硬貨がゆっくりと動き始め、鳥居の絵を通過して、何かがその場に入ってきたことを示します。その後、こちらの質問などに文字の上を硬貨が移動して答えてくれるのです。そして最後はおかえりくださいとお願いして、硬貨が再び鳥居の絵の上を通過して、こっくりさんにお帰りいただくというものでした。この間、全員が絶対に硬貨から指を離してはいけないとされていて、途中で指を離すとこっくりさんが帰らずに残って憑りつかれるとか呪われるとかと言われていたのです。マンガの中ではその内容は忘れてしまいましたが、こっくりさんを試して何か怖い事件が起こったのです。このようにやり方が詳しく紹介されたものですから、全国の子どもたちがこぞってやってみて、色々トラブルも起こったのでしょう。学校ではこっくりさん禁止令が出されていました。

しかし、ある日、小学4年生か5年生だったと思うのですが、友人のH君の家で遊んでいた時に、やってみようかということになったのです。自分の家だったら絶対やらなかったと思うのですが、友達の家という気楽さもあり、私とH君とやはり遊びに来ていたN君の3人でこっくりさんをやってみました。すると、本当に10円玉がスルスルと動くではありませんか!!。大変な驚きと怖さを感じましたが、他愛もないことをいくつか質問した後、予定通りこっくりさんにお帰り頂くことが出来、セッションは無事に終了したのです。3人で、「本当に動いたねえ、怖かったねえ」などと話していたのですが、そこにH君のお兄さん(中学生)が帰宅してきて、「お前ら何しよったが?」と。興奮冷めやらぬ小学生3人組は、こっくりさんをやったらうまくいって本当に10円玉が動いたことなどを口々に言いました。H兄は、ほんとにかや?などと言いつつ俺にもやらせると言ったので、H君N君H兄の3人で再度やることになったのです。セッションが始まって、1回目と同じように10円玉が動き始めます。するとH兄は「お前らあが動かしゆうがやろう!嘘つくな!」などと言って怒り出し、あろうことか、10円玉から指を離してしまったのです!。もう小学生組はパニックです。「指はなしたらいかんちや!呪われる!」などと叫びますが、H兄は「そんなことあるか!」と言ってなんと、文字を書いた紙をびりびりに破いて部屋を出て行ってしまったのです。残されたH君とN君は半泣き状態で、「こっくりさん、おかえりください!」と連呼しながら破れた紙の鳥居の絵のところを、ほとんど無理やり10円玉を動かして出した形にして、こっくりさんは強制終了となりました。

私とN君は早々にH君の家を出て帰宅しました。幸いにもその後4人とも特に呪われることもありませんでしたが、その日の夜は、いつもよりもいっそう強くラビちゃんを抱きしめて寝たことは言うまでもありません。

高校生ぐらいになって考えれば、H兄の言うことは正しくて、3人のうちの誰かの無意識の微細な指の動きに他の人が反応し10円玉が動くものと考えられますし、動き始めたらきっかけとなった人だけでなく他の人の動きにお互いが反応する形で、あたかも自動運動のように硬貨が動いたということだろうなあと考えたのですが、その当時は本当にパニック状態でしたね。

実は中学時代にも、これは他のクラスでの出来事の伝聞なのですが、こっくりさんをやったらN君という男子が狐に憑りつかれたので、S君が油揚げをもってお稲荷さんに謝りに行って、事なきを得たという、日本昔話か?!というような話もありました。

まあ、昭和はのどかな時代だったということでしょう。

1970年代のオカルトブームの中の一幕と思い出の心霊マンガのお話でした。



1922年宮武外骨「奇態流行史」より「コックリ様といふ遊戯」

認定管理者ファースト研修を終えて ～支え合い、学び合い、共に成長できる病棟を目指して～

5病棟主任 二宮 順子

ファーストレベル研修を終え、看護管理とは業務調整だけでなく、スタッフ一人ひとりの力を活かしながら、より良い看護に繋がる環境をつくることだと学びました。研修を通して自身の看護や関わり方を振り返り、これからどのような病棟を築いていきたいかを改めて考える貴重な機会となりました。

私が目指すのは、職員同士が安心して声を掛け合い、支え合いながら共に成長できる病棟です。看護の現場には責任と緊張感が不可欠ですが、過度な緊張感は相談や意見交換を妨げ、看護の質にも影響します。お互いの立場を尊重し、必要なことは率直に伝え合いながら、困ったときには自然と助け合える関係を大切にしたいと考えています。それは決して友達同士の「馴れ合い」ではなく、専門職としてお互いの良いところをたくさん見つけ、認め合いながら、患者さんを想う気持ちを一つにできる仲間でありたいという意味です。

主任の役割を任されてから1年半が経ちましたが、私自身、決して完璧な人間ではありません。時には失敗したり、苦手な部分があったりと、ダメなところもたくさんあると感じています。だからこそ、私一人で気負ってしまうのではなく、スタッフの皆さんに支えてもらいながら、お互いに足りない部分を協力して補える関係を築いていきたいです。

まだまだ手探りで学ぶことも多い私ですが、今回の研修を機

に、より一層気を引き締め、皆さんが安心して働ける環境を主任としてしっかり支えられる力をつけていきたいと考えています。師長やもう一人の主任と力を合わせ、自らも行動で示せるよう全力で頑張っていきたいと思います。まだまだ未熟な私ですが、皆さんと手を取り合いながら、安心して生き生きと働ける病棟を一緒に目指していければ幸いです。



7・8月は季節行事が盛りだくさん！

精神科デイケア「わくわく」で開催しているプログラムを紹介します

デイケア新聞

vol.119

院外レク 坂本龍馬記念館

今橋OTR

7月の院外レクでは、高知県立坂本龍馬記念館を訪れ、企画展『幕末行列「光と影の世界」』を見学しました。

当時の行列というと、華やかな大名行列を思い浮かべますが、展示では行列の華やかさだけではなく、遠く離れた場所まで移動するために多くの人が準備や運営に携わっていたことにも触れられています。

「光と影」というタイトルのとおり、華やかな行列の表側と、それを支えた人々の苦勞という裏側の両方から幕末の歴史を感じることが出来る展示でした。参加された皆さんも、展示を見ながら当時の様子に思いを馳せ、普段とは少し違った時間を楽しむことができたと思います。

ピア活動 DVD鑑賞

今橋OTR

7月のピア活動では、明神さんの企画で『映画おしり探偵、②梅ちゃん(WAHHAH本舗)』の2つを流しました。

映画おしり探偵では、ユーモアたっぷりのストーリーと謎解きを楽しみながら画面を観ていました。梅ちゃんのステージでは、独特のパフォーマンスに笑い声も聞かれ、楽しいひとときとなりました。普段とは少し違った雰囲気の中で、皆さんと一緒に笑ったり楽しむことができた時間となりました。

企画者からは、「大好きなおしり探偵とその映画に出てくる怪盗の存在を(梅ちゃんも)知ってもらえて良かったです。参加者も多くいたので嬉しかったです」と感想をいただきました。

ピア活動 かき氷

今橋OTR

7月のピア活動では、山本貴代さんの企画で『かき氷』を実施しました。

夏のピア活動ではかき氷が毎年恒例企画になっており、暑い日に食べる冷たいかき氷は別格でした。好みの味を選んだり、食べながらお互いのかき氷の話をしたりと暑さを忘れてひんやり涼しくなる楽しいひとときをみんなで過ごすことができました。

企画者からは「楽しかったですーみんなが喜んでくれて良かった」と感想をいただきました。来年も食べたいですねー！

院外レク 高知城歴史博物館

市原管理
栄養士

8月院外レクは高知城歴史博物館に行き「猪突猛進！幕末の板垣退助」企画展を観覧しました。夏休みということもあり多くの方が訪れていました。板垣退助(幼少期はガキ大将だったそうです)の生涯についてとても興味深く学ぶことができました！歴史が苦手な方も思わず引き込まれるような内容の濃い企画展でした。

参加された方から「板垣退助が着用していた服が展示してあり165cmくらいで細身だったということがわかった」「7か所も刺されたのに軽傷だったのに驚いた」「刀が色々展示してあり見れてよかった」など感想がありました。



ビギナーズ クッキング

市原管理
栄養士

レンジで鮭のクリーム煮を作りました。スーパーで売っている骨・皮なしの鮭の切り身は便利ですね！レンジ加熱中にクリームが吹きこぼれるというハプニングはありましたが「美味しかった！」と感想がありました。



ピア活動 カステラ

今橋OTR

8月のピア活動では、今久保さんの企画で『カステラ作り』を実施しました。

今回は、プレーン味とチョコ味の2種類を作りました。生地作りや材料を混ぜる作業など、デイケア利用者の皆さんにもお手伝いしていただきました。

焼くときは、たこ焼き器の穴に生地を半分ずつ流し入れ、焼き加減を見ながら二つの生地をくっつけて、丸いカステラに仕上げます。きれいな形にするには少しコツが必要でしたが、皆さんで協力しながら楽しく作ることができました。



就労ゼミ おーしゃん クラブ見学

今橋OTR

8月の就労ゼミでは、おーしゃんクラブへ施設見学に伺いました！

はじめにパンフレットを用いて施設の概要について説明していただき、その後、実際の作業所や休憩室、調理室など、施設内の各部屋を見学させていただきました。

参加者からは「見学をする中で気になったことを質問したり、見学後の感想では「魚釣りに使う道具の作業をしていたのは知らなかった」「人々との空間・間隔が広くて作業に集中しやすく、自分に合っていると感じた」などの意見が聞かれました。

パンフレットや資料から得られる情報だけでなく、実際に現場へ足を運び、施設の雰囲気や作業の様子を直接見たことで、より具体的にイメージできたことも多かったのではないかと思います。

今後も、参加者の希望や関心に合わせて、さまざまな作業所や就労に関する施設の見学を検討し、就労について考えるきっかけにつなげていきたいと思っています。

日帰り岡山旅行

慰安旅行に行ってきました

5病棟 看護師
小松 綾



今回の慰安旅行に参加し、普段の仕事とは違った環境で職場の皆さんと楽しい時間を過ごす事が出来ました。日頃はそれぞれの部署で話す機会が少ないスタッフとも話す機会があり、とても有意義な時間でした!(^^)!

最初に行ったのは、岡山県サウスヴィレッジのぶどう狩り体験です。実際に選んで収穫するのがとても楽しく、どのぶどうを採ろうか迷ったり、色や大きさ・きれいなぶどうを見つけたりと普段なかなか出来ない貴重な体験でした。昼食前だったのですが、採れたてのぶどうはみずみずしく甘くてとても美味しかったので、ついつい食べ過ぎてしまいました(笑)

次に倉敷へ移動し、ゆうなぎ倉敷本店で昼食を食べました。食事メニューも多くこれまた美味しかったです^ ^

昼食後は美観地区を散策しました。昔ながらの建物や風情のある町並みが残されており、歩いているだけでとても新鮮な気持ちになりました。川沿いの景色を見ながら気になったお店に立ち寄りたり、食べ歩きやお土産を買ったりと充実した時間を過ごす事が出来ました。

今回の慰安旅行は、日頃の疲れをリフレッシュする良い機会になりました。仕事の事を少し忘れて病棟スタッフともたわいもない話をしたり笑ったり、病棟以外のスタッフさんとも話せる機会もあり、親睦も深められたのではないかと思います。



最後になりましたが、今回企画・準備してくださった方々に感謝いたします。おかげ様で充実した一日を過ごす事が出来ました。慰安旅行で過ごした時間は、とても楽しく良い思い出に残る旅行となりました。旅行で得た楽しい気持ちを今後の仕事への活力に変え、仕事も頑張っていきたいと思います。





**海辺の杜
ホスピタル**

〒781-0270 高知市長浜251
TEL 088-841-2288 FAX 088-841-2280
E-MAIL info@umibenno-mori.com
URL https://www.umibenno-mori.jp/
■理事長 町田照代 ■院長 岡田和史

診療科目	診療時間	受付時間
●精神科 ●心療内科	月～金 AM9:00～PM12:15 PM1:15～PM 4:45 土 AM9:00～正午	月～金 AM8:30～PM 4:30 土 AM8:30～AM11:45

初診予約専用ダイヤル
TEL 088-841-2409

デイケア

- 精神科デイケア
「わくわく」 TEL 088-841-2081
- 重度認知症デイケア
「ほのか」 TEL 088-841-0372

相談室

TEL 088-841-2016
FAX 088-841-2286



**棧橋みどり
クリニック**

〒780-8015 高知市百石町2-8-8
TEL 088-878-9310 FAX 088-833-3602
E-MAIL info@san-mido-clinic.com
URL http://san-mido-clinic.com/
■理事長 町田照代 ■所長 山崎浩

診療科目	診療時間
●心療内科 ●精神科	月・火・木・金・土 ■隔週 AM9:30～PM12:30 PM2:00～PM 6:00* (※金曜日 PM5:00 土曜日 PM4:00) 水 AM9:30～PM12:30

受付時間

月・火・木・金 AM9:30～PM12:00
PM1:30～PM 5:30
水・土 AM9:30～PM12:00

休診日

日・祝日
水曜午後
隔週土曜

関連施設

訪問看護ステーション
うみべ

〒780-8015
高知市百石町2-8-8
TEL/FAX 088-833-1177



診療実績

2026.7/1～7/31 (のべ)

海辺の杜ホスピタル
・外来総数 2,523人
・うち新患外来総数 38人
・入院総数 24人
・うち新患入院総数 9人
・退院数 21人
・精神科デイ利用者数 470人
・ショートケア利用者数 66人
・重度認知症デイ利用者数 250人

2026.8/1～8/31 (のべ)

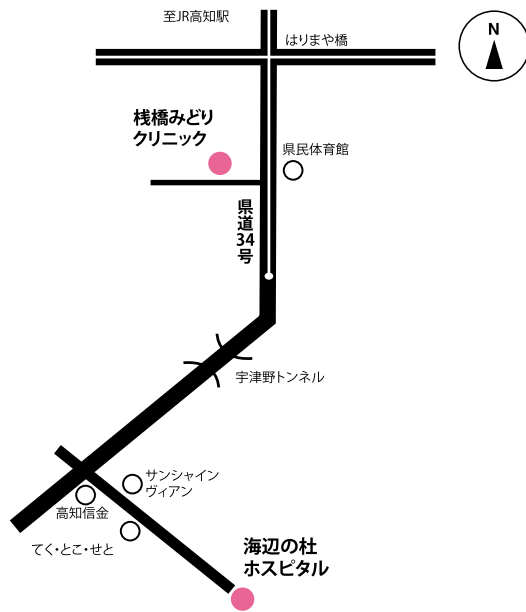
海辺の杜ホスピタル
・外来総数 2,318人
・うち新患外来総数 36人
・入院総数 26人
・うち新患入院総数 6人
・退院数 32人
・精神科デイ利用者数 468人
・ショートケア利用者数 55人
・重度認知症デイ利用者数 209人

棧橋みどりクリニック
・外来総数 586人
・新患外来総数 38人

棧橋みどりクリニック
・外来総数 511人
・新患外来総数 39人

訪問看護ステーションうみべ
・訪問件数 511件

訪問看護ステーションうみべ
・訪問件数 429件



お寄せ下さい

院内誌に関する、ご意見・ご感想、ご要望、投稿記事等、どんな事でも構いません。お気づきの点がありましたら、思いのままに下記までご投稿下さい。

提出先: Myweb Mail → **新規作成** → **アドレス帳**
→ カスタムグループ
→ 院内誌編集係 → **メール作成** まで。



編集後記 (編集長: 橋田)

夏休みに京都から帰省した大学生の息子が「今回の交通費はいらない」と自立の兆し。

しかもご近所さんや祖父母へのお土産まで買っている。そして、私の質問にも全て応えてくれる(10年ぶりの親子らしい会話ができています)。外食にも一緒に出掛けてくれる。こんな日が来るとは!大きな成長を感じ、胸を熱くしました。

そして京都へ帰り際、「相談があるがやけど」と不穏な一言。

「中型バイクが欲しい。」…魂胆はこれか。そんなことでもない、こんなに一変はしないよね。

バイク…母としては危ないでしかない。大きな悩みを置いて京都へ帰って行きました。

今月の表紙

この花は地域の横浜中学校生徒会の皆さんが当病院入口に植え付けてくれたものです。毎年お世話になっています。いつもありがとうございます。

ポーチュラカの花言葉は「いつも元気」です。夏の厳しい暑さや乾燥にも負けず、炎天下で次々と色鮮やかな花を咲かせるタフな姿に由来するようです。

今年もたいへん暑かったですね～冬は来るんでしょうか!? 皆様も花の様にタフで体調にも気をつけられて元気でお過ごし下さい。

